

令和2年度佐世保市「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業」中止経緯報告書

門田 理世（西南学院大学） 中ノ子 寿子（西南学院大学大学院 研究生）

渡邊 由恵（九州産業大学） 岩淵 善道（西南学院大学大学院生）

I. はじめに

佐世保市は平成27年度より、佐世保市幼児教育センターにおいて「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業」を実施している。本事業は、子育て支援啓発事業の一環として、参加する保護者が、①親としての喜びを感じる、②自分の子育てを振り返る、③自分の子どもの成長や将来をイメージする、④小学生とかかわることで、地域の一員としての存在を意識することを目的としているだけでなく、参加する児童が、①いのちの大切さ・尊さ・不思議さ、②相手を思いやる気持ち、③自分の家族（親）との関係を考えるきっかけ、④親の思いを知る、⑤将来の子育てを体験する機会となることを期待している。また、佐世保市教育委員会は、学校・地域・家庭が連携していのちの大切さについて考える取り組みとして、毎年6月を「いのちを見つめる強化月間」、6月1日を「いのちを見つめる日」と定めており、本事業はその取り組みにも寄与するものである。

例年、西南学院大学大学院 門田理世研究室（以下、門田研究室）では佐世保市幼児教育センターと共同で、児童・赤ちゃんの保護者、それぞれの立場における事業の意義を検証し、本事業の成果について結果報告をおこなってきた。しかし、令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大に伴い、佐世保市は事業に参加する児童や赤ちゃんとその保護者、諸関係者の安全と健康を守るため「赤ちゃんふれあい事業」とそれに付随する「大きくなったね」事業の中止を判断した。したがって、門田研究室でも本事業の成果について結果分析をおこなうことが叶わなかったため、その中止経緯を以下に報告する。

II. 事業中止経緯

令和元年度は「赤ちゃんふれあい事業」に5校、「大きくなったね」に2校の小学校が参加しており（表1）、本年度も両事業に参加希望の小学校を募る予定であった。

表1. 令和元年度の事業参加校

事業	参加校	事業	参加校
赤ちゃんふれあい事業	木風小学校	大きくなったね	潮見小学校
	潮見小学校		白南風小学校
	白南風小学校		
	大久保小学校		
	金比良小学校		

しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止策により緊急事態宣言が発せられ、佐世保市でも小学校が休校に、幼児教育センター内の子育て広場も休館（4月22日～5月17日）となり、例年6月の「いのちを見つめる強化月間」も延期された。子育て広場は緊急事態宣言後から現在に至るまで同時滞在組数（5～8組）や利用時間（1時間程度）の制限を設け、3密対策に努めている。7月中旬より佐世保市でも新型コロナウイルス感染者が増加したため、本事業開催の可否を幼児教育センター職員で協議し、児童や赤ちゃんとその保護者、諸関係者の安全が最優先であることを踏まえ、9月時点で「赤ちゃんふれあい事業」と「大きくなったね」事業の双方に中止の判断がなされた。

Ⅲ. 次年度以降の事業について

昨年度の事業の結果分析からは、参加した児童（169名）の97.6%は赤ちゃんやその保護者と触れ合う経験を肯定的に捉えており、事業へ参加することは「赤ちゃんに関する知識や役立つ知識を得る」「保護者の立場の理解が促される」等の意義があった。また、2校で行われた「大きくなったね」の分析からは思春期にさしかかった児童の複雑な意識も垣間見え、事業に参加した児童を縦断的に追っていく必要性も示された。さらに、参加した赤ちゃんの保護者全員（延べ75名）が事業への参加を肯定的に捉えており、その理由として「自身の子育ての振り返りと見通し」だけでなく、「小学生の学びへ貢献」「社会とのつながり」等も挙げられた。この結果からは、本事業が母親としての社会参加を促す子育て支援の一助となっていることが伺える。したがって、本事業は参加する小学生、赤ちゃんの保護者にとって様々な互恵性があり、佐世保市の地域全体に貢献する重要な取り組みと言える。

次年度以降の事業については、コロナ禍における安全な事業実施の在り方として、オンラインの使用を検討している。事業参加を希望する親子が集まった子育て広場と、実施希望の小学校5～6年生のクラスをオンラインでつなぎ、互いの様子を画面越しに見たり、児童が保護者へ質問をしたりするという形を想定している。門田研究室では佐世保市の判断に準じつつ、事業に寄与する関わりを模索していく。これまでの事業実績を検証し、新たな生活様式における事業実施の在り方について、佐世保市と共に協議を進めていきたい。